ライフ（生活の質）の向上につながるといったことを、臨床や教育で学ぶ機会があっていいのではないでしょうか。

学部3-4年生の災害看護学の授業（参加型ワークショップ）（木下）

実務経験は教えに不可欠 ［木下］
社会全体見渡して行動する役割 ［白石］

小木曽 実務の現場と学びの場で感じられている、葛藤やギャップはありますか。また、最後に実務家教員に期待する役割についてもお願いします。

木下 看護は学問的にまだしっかりしていないと感じます。看護学で業績を上げている先生でも、実際は文化人類学や心理学など他分野の手法を取っている面があります。

実務家教員という特別なものがあるわけでなく、人に教えるためには実務のバックグラウンドがあった方がよりいいと考えています。そうでなければ本を読んでいれば、という話になってしまいます。特に専門職と呼ばれる分野では、実務家教員に学ぶ意義を知ってもらい、実務家教員がどんどん増えていってほしいです。

白石 医師も看護師ももちろん専門職ではありますが、産業界に出ていくと営業や企画の人たちもプロフェッショナルな経験を積んでいます。実務家教員は専門分野で知識があるだけでなく、広く社会全体を見渡せる立場にあります。進化型実務家教員にも、社会のなかで何が必要か、そして自分に何ができるのか。そんなことを考え続け、行動し伝えていく大きな役割があるのではと思い期待しています。

小木曽 本日は大変貴重な経験やキャリアチェンジのお話をいただき、ありがとうございました。進化型実務家教員養成プログラムには、共通の基本コースに加え専門コースを4コース（経営実務コース、減災・医療コース、心理カウンセリングコース、スポーツ実務コース）設置予定です。進化型実務家教員養成に向け、一層プログラムの充実を図ってまいります。

木下真里（きのしたまり）さん

プロフィール

高知県立大学看護学部（災害看護学）准教授。公衆衛生の分野でも国外で経験を積んだ後、都内の専門医療機関で患者と向き合う仕事に従事。高知県立大学では次の世代に経験を伝えている。主な活動は、NGOピースウィンズジャパンの「ネパール国シンドゥルパルチョーク郡給水アクセス改善事業」の支援、国内の自治体などに対する「COVID-19×自然災害時の対策について専門的助言」など。研究テーマは、災害時全被災者の健康状態把握のための情報システム（COACHES）の開発、地域の感染症に対する対応能力向上プログラムの共同研究など。

白石みどり（しらいし）さん

プロフィール

株式会社スノーム代表取締役。看護師、公認心理師。17年間、看護師として主に救急救命、集中治療室と終末期医療に従事。患者や家族、医療従事者に“心の支援”が不足し生きる意欲を低下させていることと感じ、大学の心理学科へ。経営学科で作成した事業計画で各ビジネスプランコンテストに出場し、多くの評価を得る。

2012年11月に株式会社スノームを設立。現在は、企業向けに心理支援サービスを展開し、休職発生率や復職後再休職率の減少、休職日数の短縮などで事業の生産性向上に貢献している。経済産業省主催UVGPの8位入賞、日刊工業新聞社主催「キャンパス・ベンチャー・グランプリ」など受賞。日本心身医学会会員、公衆衛生学会会員など。

TEEP実施委員会では、コンソーシアムの様々な情報発信についても積極的に行っています。詳しくは随時以下のWebサイトにて案内してまいりますので、ぜひご覧ください。

TEEP実施委員会事務局（名古屋市立大学 教務企画室内） https://teep-consortium.jp/

TEEP 進化型実務家教員養成プログラム | NEWS LETTER | vol.12
発行者 TEEPコンソーシアム実施委員会　事務局 名古屋市立大学教務企画室内　〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1
発行日 2021年2月1日　連絡先 E-mail：teep_office@sec.nagoya-cu.ac.jp

文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」

TEEP 進化型実務家教員養成プログラム NEWS LETTER

VOL.12

進化型実務家教員への扉

いよいよ、2021年春より「進化型実務家教員養成プログラム（TEEP）」基本コースの受講生を受け入れます。実務家教員インタビューの３回目は、コンソーシアムで取り組むTEEPに実施委員としても関わっていただいている、高知県立大学の木下先生と株式会社スノーム代表取締役白石さんに登場願いました。共に看護職としての豊かな経験をお持ちで、大学や社会のなかで実務家教員としても活躍されています。

お二人からの熱いメッセージを伝えます。（文・小木曽早苗）

実務家教員インタビュー ③

インタビュアー ● 名古屋市立大学 高等教育院 特任助教……小木曽早苗

高知県立大学
災害看護学 准教授
木下真里さん

株式会社スノーム
代表取締役
看護師・公認心理師
白石みどりさん

看護にも新たな視点を

小木曽 実務家教員インタビューの3回目は、「進化型実務家教員養成プログラム（TEEP）」に実施委員としても関わり、実務家教員としても活躍されている二人に登場願いました。まずはそれぞれのご経歴を改めて教えてください。

世界飛び回る国際協力に従事 ［木下］
現場一筋で鍛えられた17年 ［白石］

木下 私は2019年から現在の高知県立大学に赴任してまいりましたが、それまではずっと実務や研究に携わってきました。そのうちの10年ほどは、海外での国際協力の仕事です。オセアニア、南極以外の大陸はすべて仕事で訪れました。

白石 私は高校の衛生看護科で学んで以来17年間、看護職をしてきました。働きながら正看護師の資格を取るため、午前中は神経内科の外来をこなし、午後は定時制の看護学校に通い、夜間は救急の当直をするなど、現場でバリバリ学び、働いてきました。1カ所にいることは少なく、救命の現場を中心に約2、3年で職場が変わりました。

ビジネスプランを発表する白石さん

小木曽 同じ看護職でも、白石さんは救急の現場での気付きからその後起業という道を選択され、木下先生は国際協力から再び国内に戻られた後教育分野に転身をされていくわけですね。

治療以外も患者に向き合う ［木下］
心理学の学びから起業へ ［白石］

初めてのセミナー（白石：中央）

木下 私は大学で看護学を学んだものの、学問領域としての看護学に十分確信が持てませんでした。海外でも公衆衛生の分野において経験を積むこととしました。ところがしばらくして、このままではただの頭でっかちになってしまうと気付き慌てて帰国、都内の専門医療機関で一人一人の患者さんとじっくり向き合う仕事に就きました。

小木曽 木下先生は、「コーディネーターナース」としても関わりを深められたと伺っています。

木下 はい。当時の職場にHIV（エイズウイルス）専門の治療機関があり、HIV感染者の看護にあたっていました。HIVは今、薬でウイルスの量を減らせるようになっています。薬を飲むのは1日1回、数秒の間です。それ以外の大半の時間、患者さんは日常生活を過ごしていますが、そこで何か問題があれば、せっかくの治療が継続できなくなります。治療を継続してもらうためには日常的に看護師の果たす役割が大きく、私も、家族からの相談、もめごとの仲裁にまで関わりました。

患者さんは治療以外の時間、社会のなかで普通に生活しています。一見、病気と無関係なことも、治療の進め方と密接に結びついていることが分かりました。

そうして日々患者さんから学ぶうちに、看護に自信がもてるようになりました。次の世代へと経験を伝える仕事に就こうと思ったときに縁あって大学教員の道に進むことになったのです。

小木曽 患者さんが深い孤独を抱え、孤立して治療を放棄しないよう看護師が行う総合的なサポートは大きなものですね。白石さんは、起業に至るまでに社会人大学生としても学びを経験されています。そのいきさつや背景を教えて下さい。

白石 救命の現場には自傷した人や子どもも来ます。そうした人には単なる救命治療だけでなく、もっと根本的な支援が必要なのではと思いました。せっかく命を取り留めても再び、という例もあり医療だけでは困難な事例を経験しました。もう一つ、普段は温厚な看護師が自傷する人を前にすると時に攻撃的な言葉を使ったり、差別的になったりしてしまうという問題もありました。そんな心の動きの答えが、心理学にあるのではと、大学の心理学科に入学したのです。

実際に学んでみると、医療現場に有効な心理支援というものが分かり、その支援を届けたいと思いました。ただ、当時は名古屋市で学んでいましたから、実家の豊川市や同僚のいる大阪などにまで広範に届けるにはどうしたらいいのだろうと考えました。広く届けるには何かしら計画が必要だろうと、他学科で企画論と事業計画論を履修。そこで作った事業計画書を担当教員に言われるまま外部のビジネスコンテストに出したら優勝してしまい、会社を作らなければいけないことに（笑）。

実はその教員こそ、TEEPの実施委員長である鵜飼教授でした。当時、本当に戸惑いましたが覚悟を決め、職場のメンタルヘルスなど従業員支援プログラム（EAP）を提供する会社を起業しました。

介護向けメンタルヘルス研修（白石）

NGO委託で公衆衛生専門家として災害被災地の衛生状態を視察（木下）

小木曽 ご自身の経験のなかでの気付きと学びが相まって、まるで導かれるように起業への道が開けていかれたのですね。ちなみに社名の「スノーム（SNOM）」にはどのような意味がありますか。

白石 「Safety Net Of Mind（セーフティネット・オブ・マインド）」の頭文字です。事業計画書を作っているときに先生が「セーフティネット」と黒板に書かれました。これは社名に入れろということだなと直感し、取り入れました。結果的にすごく気に入った社名になりました。

被災地の問題に看護からも声を ［木下］
「おカネ」まで考えられるように ［白石］

小木曽 看護人材の育成という側面から、木下先生の大学教育に対する思いや工夫はいかがでしょう。

木下 私は自分が大学を卒業して以来、アカデミックな場での看護に疑問を持っていました。看護は実学や応用です。理論などを発達させて何になるんだろう、といった思いがずっとありました。

ただ、私自身国際協力やコーディネーターナースなどの経験を十分に生かして患者さんと接してきたものの、周囲からの評価に虚しさも感じていました。そこに大学の仕事の話があり、ようやくチャンスが巡ってきたと思いました。

大学では、学生が授業に主体的に参加できるように以下のような工夫をしています。①社会状況に即した話題を取り上げる　②国際協力で使う参加型ワークショップの手法を用いる　③自由な意見交換を行うため、グループ間ローテーションによるディスカッションも取り入れる　④プレゼンやレポートで述べるべき項目や配分をあらかじめ明確に示し、課題の学習に集中できるようにする　⑤毎回授業の改善について意見を聞き、対応する　⑥遠隔授業ではなるべく会議システムを用いたリアルタイム授業を行い、授業の合間に少人数グループのトーク時間を設け遠隔授業ならではの楽しみを持ってもらう。

小木曽 災害看護学も先生の担当される領域ですね。

木下 高知県は、南海トラフ地震で甚大な被害が想定されています。昨今、水害を含めて各地で大きな災害が続いていますが、日本の災害被災地での生活環境は驚くほど低いレベルです。

イタリアなどを見ると、災害があれば当然のように快適な環境が提供されます。しかし、なぜか日本では「体育館で雑魚寝」のスタイルが変わっていません。災害だから、非日常だから文句を言ってはいけないという諦めや、「忍耐の美徳」みたいなものが根強いのでしょう。長引くストレスフルな避難生活は、体調を崩し災害関連死を招くことになりかねません。それに対して、看護の分野からきちんとエビデンスをもって発言できていないことに危機感を持っています。

白石 私も災害看護に少なからず携わっていますので、看護師が現場で発信できる社会になれば本当にいいなと思っています。一方、現場から一歩引いた立場になって見ると、看護師は「おカネ」のことを考えるのにものすごく抵抗を感じる人が多いといえそうです。自分たちがしている医療・看護サービスにいくらかかっているのか、予算をどこから取ってくるかについては考えたこともない人が大半だと思います。

でも、物事を動かすには「おカネ」がいります。そこをうまく回すと、患者や被災者のクオリティー・オブ・

公衆衛生専門家としてミャンマーにも派遣（木下）